

藤井達吉姉妹・姪の制作による工芸作品紹介

高木久子*

はじめに

愛知県美術館では、現在1,512件の藤井達吉関連資料を所蔵している。うち1,477件が達吉本人およびその支援団体である愛知県総合芸術研究会から受贈した藤井達吉コレクションであり、35件が愛知県美術館およびその前身である愛知県文化会館美術館が購入もしくは他所蔵者から受贈した資料である。(詳細は『愛知県美術館 研究紀要 第22号(2016年3月刊)』参照)

その大半は、もちろん藤井達吉本人の制作および案によるものであるが、そのほかに興味深い110点余の作品群がある。

それは藤井達吉の姉妹・姪の手になるものであり、彼女たちは達吉の制作活動のほぼすべての時期を彼とともに過ごし、互いに制作に励んだ。作品の中には達吉との合作も見受けられる。

達吉の伝記、年表等には必ず登場する姉妹・姪であるが、現在までのところ彼女たちに焦点をあてた研究は進んではいないようで、報告等も少ない。本報告で参照したものとして下記2点がある。

- ①富田康子「手芸のユートピア－藤井達吉とその家族の女たち」『染織 a』295号、染織と生活社刊、2005年10月
- ②千葉真智子「工芸一家－藤井達吉と姉妹・姪」『藤井達吉の全貌－野に咲く工芸・宙を見る絵画』展図録、章扉解説、株式会社キュレーターズ制作／発行、2013年

また、大正後期から昭和初期にかけて達吉が精力的に取り組んだ活動に、家庭における手芸の普及がある。彼は雑誌『主婦之友』からの依頼に応じて1921(大正10)年から執筆を続け、家庭で行う手芸作品の製作法と図案を紹介した。次第に姉妹たちも執筆するようになり、特に長妹・桑は13点の製作法を紹介している。さらに、1923(大正12)年には、達吉と姉妹・姪の作品を展示する「家庭手芸品展覧会」が主婦之友社主催で開催され、翌年には、読者から作品を公募して審査するものとなっていく。これについては、石田あゆ「震災支援としての婦人雑誌のメディア・イベント」『京都社会学年報』第12号 2004年に詳しい。

本資料ではまず、達吉を中心とする藤井家の家系図と、姉妹・姪の略歴を紹介し、次に、1915(大正4)年から1934(昭和9)年にかけて、彼女たちが官展(農展、帝展等)に積極的に出品した時期の作品と、雑誌『主婦之友』に掲載した手芸製作記事を合わせて紹介する。

そして最後に、愛知県美術館で所蔵する110点余の姉妹・姪の作品(一部、伝を含む)のうち、着物を含む平面作品計48点のリストと、さらにそのなかから屏風、壁掛形式の作品画像を掲載する。

現在、彼女たちの作品でその所在が明らかにされているものは多くない。鑑賞の対象としてだけでなく日常のなかで身近に用いられることも多い工芸作品、また着物、帯などの作品が多かったであろうことを考えると、どれだけの作品が制作され、また今日まで受け継がれているのか定かではない。

図版として残されかつ制作年の特定できる官展等への出品作品及び愛知県美術館所蔵作品を合わせて紹介することにより、今後の作品研究、作家研究への一助としたい。

1. 藤井達吉姉妹たちの略歴及び作品について

(1) 略歴

彼女たちの略歴について語るためには、その工芸との関りのきっかけとなる達吉本人についても触れざるを得ないが、本稿ではあくまでその発端部分の記述にとどめる。達吉本人の伝記とし

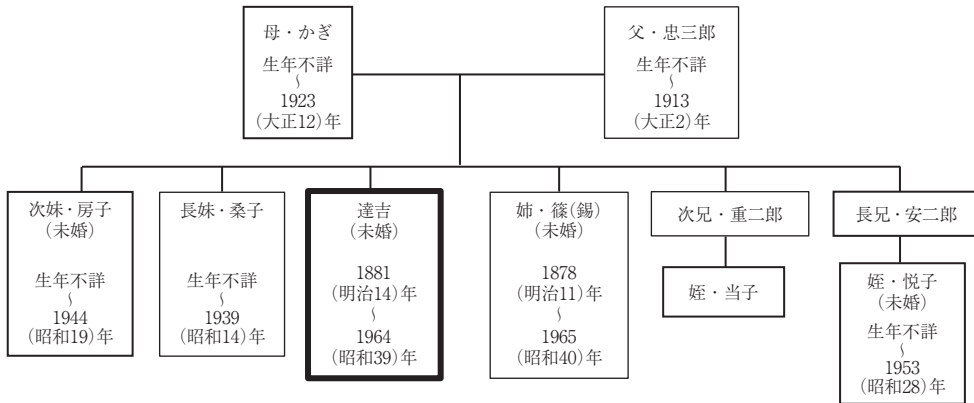
* 高木久子：愛知県文化会館・図書館部門、愛知芸術文化センター・図書館、アトライブラリー、美術館等の施設に長年にわたって勤務した元愛知県職員。退職後、愛知県美術館所蔵作品、とくに藤井達吉コレクションの調査研究に協力する。

ては、『藤井達吉の生涯』（山田光春著、風媒社発行、1974年）（文献1）及び『孤高の芸術家藤井達吉翁』（松尾信資編 愛知県総合芸術研究会発行 1965年）（文献2）がある。また『藤井達吉の全貌－野に咲く工芸・宙を見る絵画』展図録（株式会社キュレーターズ制作／発行、2013年）（文献3）には資料として、詳細な年譜が掲載されている。本略歴の執筆にあたっては、上記3文献を参考とした。

藤井達吉は、日本の工芸の近代化に大きな役割を果たした作家の一人であり、1881（明治14）年、愛知県碧海郡棚尾村（現・碧南市）に生まれた。同地の尋常高等小学校卒業後、複数の職を経た後、服部七宝店に勤務、そのなかで七宝技法を習得し図案についての関心を深めた。その後、東京に出て、次兄・重二郎とともに七宝制作に携わるが事業に失敗、美術工芸家としての道を歩み始める。

下図のとおり、藤井家は三男三女の六人兄弟姉妹であった。

図 藤井達吉を中心とする家系図



1910（明治43）年頃、父の事業の失敗等から、一家は東京に出て、上野桜木町で達吉とともに暮らすことになった。この時には、長兄・安二郎の妻が死亡していたため姪・悦子を引き取っており、次兄・重二郎の娘、姪・当子と合わせて、八人の大所帯であった。

母かぎは、「裁縫や手芸の技に長じていた」¹そうので、その教えを受け、日々暮しをともにした達吉や姉妹たちも裁縫、手芸に親しみ、姉妹たちは和裁で苦しい生活を支えたという。

その後達吉は、渋谷宮益町（1911〔明治44〕年）、芝二本榎西町（1912〔明治45〕年）、大井町庚塚（1918〔大正7〕年）、神奈川県足柄郡真鶴町（1935〔昭和10〕年）と転居を繰り返し、その間に両親は死去するも、姉妹・姪たちは生活をともにした。その後、1945（昭和20）年に現・豊田市小原村に疎開し、愛知県での生活をまた始めることになる。

姉・篠（すず）子は3歳年上で、1878（明治11）年生まれ。未婚で、その生涯を達吉とともに過ごしており、達吉の死の翌1965（昭和40）年に死亡した。なお、篠は制作者名や執筆者名には、「錫」の字を多く使用しており、「篠子（しのこ）」²「篠（じょう）」³とも名乗っている。

篠が工芸作品の制作にいつから携わり始めたのか明らかではないが、彼女が工芸作家として公の場に登場するのは、産業育成を目的として1913（大正2）年から始まった農商務省図案及応用作品展覧会（以下、「農展」。第6回（1918〔大正7〕年）からは「農商務省工芸展」、第12回（1924〔大正13〕年）からは「商工省展」となる）で、その第3回（1915〔大正4〕年）が初出品である。さらに、1927（昭和2）年、第四部（美術工芸部門）が開設された帝展にも第9回（1928〔昭和3〕年）から出品。1934（昭和9）年の第15回帝展まで20年にわたり、他の公募展も含めほぼ途切れることなく出品を続け、入選を果たしている。出品作品は屏風、壁掛等、平面作品であり、

1 （文献1）p.34

2 『主婦之友』第19巻3号 主婦之友 昭和10年3月 p.484

3 『日展11』帝展編6 日展史編纂委員会編 社団法人日展発行 1982年 p.472 第15回展美術工芸出品目録

技法は刺繍を主とし蠟纈も手掛けている。なおそれ以降の官展、公募展への出品記録は見出せていない。

藤井達吉コレクションを中心とする愛知県美術館所蔵作品には94点の篠作品があり、うち34点は平面作品、技法は刺繍が殆である。一部制作年が不明なものを除いて全て1951（昭和26）年から1962（昭和37）年までの作品であり、晩年まで針を持つ手が止まることはなかったようである。

長妹・桑（くわ）子は欽、久和子とも称し、三姉妹のうち、唯一の既婚者である。1927（昭和2）年に結婚するもその後離婚し、1934（昭和9）年、碧南出身の俳人であり達吉と親しい間柄であった杉浦冷石の父杉浦福松と再婚した。1939（昭和14）年、福松の死後藤井家に戻り、同年7月13日に死亡している。⁴ 農展に第4回（1916 [大正5年]）から第13回（1925 [大正14]年）まで出品。帝展、公募展にも出品している。また桑は、達吉が雑誌『主婦之友』に掲載を始めた手芸作品の製作法にも1921（大正10）年から1933（昭和8）年まで13点執筆している。技法は刺繍、蠟纈が多く、主婦之友誌上でも「布置刺繍」「フランス刺繍」「毛糸刺繍かがり」等を紹介し、屏風では「竹屋町縫」も行っている。現在、制作年の判明している最後の作品は1932（昭和7）年の第13回帝展出品作品であり、福松と再婚後も「機を織ったり染色をしたりして、幸福な毎日を送っていた」⁵とされている桑のその後の作品は明らかでない。

次妹・房（ふさ）子は、姉二人が刺繍、蠟纈など布を支持体とする作品を制作しているのと異なり、七宝、金工技法の立体作品を多く制作した。第5回から第14回まで農展に出品している。1944（昭和19）年、死去。未婚であった。

姪・悦子は長兄・安二郎の娘で、母の死に伴い藤井家で暮らすこととなった。染色に優れていたといわれ、未婚であり達吉が自分の跡を継ぐものと期待していたが、1953（昭和28）年、死去。達吉は絶家を決意し、1,400件近い作品及び所蔵品を、旧愛知県文化会館に寄贈することにした。第7回農展（1919 [大正8]年）から出品、第9回帝展（1928 [昭和3]年）にも篠とともに入選している。技法は刺繍、蠟纈で、クッション、壁掛等を発表している。

姪・当子は、次兄・重二郎の娘で、彼女もまた藤井家に引き取られた。篠たち姉妹や悦子とともに刺繍にとりくむ写真⁶は残されているが、彼女は工芸作家の道を歩まず、結婚し佐藤姓となった。

（2）姉妹・姪たちの作品について

次章で掲載する農展、帝展等の目録以外では、作品集、目録など作品図版が掲載されている資料として現時点で確認できたものは下記6点である。



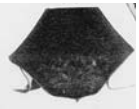


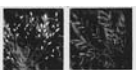






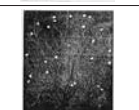


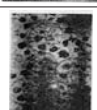





- ①『藤井達吉翁作品集』（愛知県総合芸術研究会 1967年／1970年）
達吉の作品集の中に姉・篠の章を設け、作品12点を掲載している。作品はすべて愛知県美術館の所蔵作品である。
- ②『豊田市郷土資料館収蔵品図録 II 藤井達吉・篠寄贈資料』（豊田市郷土資料館 1980年）
達吉死後、姉・篠が、藤井達吉・篠の名で豊田市に寄贈した作品等の図録であり、篠の作品と愛蔵品も掲載されている。
- ③「藤井達吉の芸術－生活空間に美を求めて－」展図録（藤井達吉展実行委員会 1991年）
同展で展示された篠作品が1点、「協力」という形で掲載されている。
- ④「藤井達吉の全貌－野に咲く工芸－宙を見る絵画」展図録（キュレーターズ 2013年）
同展で展示された桑、房と達吉との合作屏風が各1点及び篠の屏風が1点掲載されている。
- ⑤碧南市藤井達吉現代美術館ウェブサイト
「所蔵作品一覧」に篠作品が1点掲載されている。
- ⑥『愛知県美術館 研究紀要 第22号』藤井達吉関連資料総目録（愛知県美術館 2015年）
愛知県美術館が所蔵する姉妹・姪の作品を、伝も含めて掲載している。
















4 （文献2）p.214






5 （文献2）p.215


6 （文献2）p.83

2. 公募展出品作品一覧

		篠《錫》(すすこ)			桑《くわこ》	
		作品出品		雑誌『主婦之友』掲載	作品出品	
1915年 (大正4)	農商務省第三回 図案及応用作品 展	海底模様麻切縫二枚折 屏風				
1916年 (大正5)	農商務省第四回 図案及応用作品 展	熊谷草麻地刺繍二枚折 屏風			四ノ花瓶刺繍卓掛	
1917年 (大正6)	農商務省第五回 図案及応用作品 展	函根「ウツギ」ノ花麻 地刺繍二枚折			柳模様蠟繖刺繍麻地二 枚折	
					山ウツギ実猫ヤナギ毛 織刺繍クッション	
1918年 (大正7)	農商務省第六回 工芸展	山つゝじ模様麻地刺繍 二枚折			竹二草模様麻地刺繍二 枚折	
1919年 (大正8)	農商務省第七回 工芸展	野葡萄刺繍二枚屏風			柳蘭刺繍二枚折屏風	
1920年 (大正9)	農商務省第八回 工芸展	石楠花刺繍二枚折屏風			(二等賞) 高原ノ花模 様刺繍二枚折屏風	
					(三等賞) みかん模様 蠟繖二枚折屏風	
1921年 (大正10)	農商務省第九回 工芸展	(二等賞) 春山草模様 蠟繖刺繍麻地二枚折屏 風			(三等賞) 秋草模様蠟 繖刺繍麻地二枚折屏風	
1922年 (大正11)	農商務省第十回 工芸展	題「山路ニテ」刺繍帯			(三等賞) 山草図ピロ ード蠟繖二枚折屏風	
1923年 (大正12)	農商務省第十一 回工芸展	(二等賞) 柳ランの花 蠟繖刺繍二枚折屏風			(三等賞) 晩秋蠟繖刺 繍二枚折屏風	
1924年 (大正13)	商工省第十二回 工芸展	(三等賞) のりうづき の花模様二枚折屏風			(三等賞) ぎん鳩二枚 折屏風	

		房 (ふさこ)				悦子 (えつこ)	
雑誌『主婦之友』掲載		作品出品		雑誌『主婦之友』掲載		作品出品	
		椿ノ花銅打出シ七宝手箱					
		糸瓜ノ花模様桐材乱箱					
		秋ノ野銅打出手箱					
		シチン模様銅手箱				日向草鶏頭花刺繍クッション	
		(褒状) つり舟草模様銅打出シ七宝手箱				茄子ト胡瓜模様刺繍クッション	 
5巻 5号	手軽に出来て優雅な手提袋	菊模様銅打出手箱				紫ツツジ模様麻地二枚折屏風	
		野葡萄模様銅蒔箱					
		野葡萄ピロウド地漆描二枚折屏風				(褒状) アカソの花刺繍壁掛	
8巻 2号	布置刺繍応用の座布団作り方	銅七宝入蒔箱、あざみ模様				(三等賞) けいとう壁掛	
8巻 11号	フランス刺繍を応用した卓子掛						

		篠 (錫) (すすこ)				桑 (くわこ)	
		作品出品		雑誌『主婦之友』掲載	作品出品		
1925年 (大正14)	商工省第十三回 工芸展				クッション、秋の野けし		
1928年 (昭和3)	帝展 第九回	ろう織鳥毛織うばゆり					
1930年 (昭和5)							
1931年 (昭和6)	帝展 第十二回	芍薬文鳥毛屏風					
1932年 (昭和7)	帝展 第十三回				竹屋町織草文二枚折屏風		
1933年 (昭和8)							
1934年 (昭和9)	帝展 第十五回	射干文鳥毛額					
1935 (昭和10)				19巻 3号	手提形お弁当箱入 の作り方 刺繍入の小学生用 筆入の作り方 上靴や草履入袋の 作り方		
1922年 (大正11)	平和記念東京博 覧会	刺繍麻地蠟燭春と秋二 枚折					
1924年 (大正13)	巴里万国装飾美 術工芸博覧会	柳蘭花刺繍二枚折屏風 ※農商務省第十一回工芸展出品作品と同一。 農商務省の買上げの上、出品される。博覧 会終了後は、フランス商工省に寄贈された。					
1925年 (大正14)	日本工芸美術会 第1回展覧会				秋の野げし壁掛		
1926年 (大正15)	第1回聖徳太子 奉讃美術展覧会	麻地蠟燭刺繍へらあざ みの花三枚折			麻地刺繍から花草壁掛		

		房 (ふさこ)			悦子 (えつこ)	
雑誌『主婦之友』掲載		作品出品		雑誌『主婦之友』掲載	作品出品	
9巻 2号	上品な革クッションの作り方	蓑箱、銅打出七宝入				
9巻 8号	気のきいた夏の座布団カバーの作り方					
12巻 4号	芋版更紗の帯側の簡単な染方				ろう織鶏頭花 (壁掛)	
14巻 3号	皮細工の可愛らしい通学用鞆と草履袋の作り方			14巻 5号	デンマーク刺繍応用の趣味深い衛生的な小物掛の作り方	
				14巻 8号	手柄を利用した優雅な小物	
16巻 3号	栗饅頭の空箱で優美な文箱					
17巻 2号	古木箱に手工紙を貼りませた乱箱					
	毛絲刺繍かざり仕立の状挿					
17巻 3号	変り型の筆入二種の作り方					
	小学生用草履袋の作り方					
17巻 6号	絞染と木の葉染応用の和洋両用に向く新趣味なカーテン					
				19巻 3号	通学用手提鞆の簡単な作り方	

- (出典) 農商務省展、商工展：国立国会図書館編「国立国会図書館デジタルコレクション」
帝展：『日展史編集委員会企画・編集『日展史8』（1982年）、『10』（1983年）、『11』（1983年）』
平和記念東京博覧会：『現代の図案工芸』第96号 1922年5月（フジミ書房刊 2003年）
巴里万国装飾美術工芸博覧会：『巴里万国装飾美術工芸博覧会 日本産業協会事務報告書』（フジミ書房刊 2001年）及び『巴里万国装飾美術工芸博覧会 政府参同事務報告』（商工省商務局 1927年）
日本工芸美術会第1回展覧会：『工芸時代』第1巻1号（アトリエ社 1926年12月）
第1回聖徳太子奉讃美術展覧会：同展目録
- (注) 旧字体は新字体にあらためて記載した。

3. 愛知県美術館所蔵 藤井姉妹・姪による平面作品一覧および作品画像

(1) 平面作品一覧

	作品番号	コレクション 番号	作者名	作品名	制作年	員数
(1)	JJ195500176000	FT245	伝藤井篠	花ちる頃		1幅
(2)	JJ195500225000	FT295	藤井篠	刺繍「夏の山」		1面
(3)	JJ195500226000	FT296	藤井篠	刺繍「秋の山」		1面
(4)	JA195500781000	FT1256	藤井達吉・篠	蠟地古代文金銀泥描長着		1枚
(5)	JA195500782000	FT1257	藤井達吉・篠	紫地松竹文金銀泥描長着		1枚
(6)	JA195500783000	FT1258	藤井達吉・篠	黒地草文金銀泥描紋付長着		1枚
(7)	JA195500795000	FT1270	藤井達吉・篠	黒地山水文金泥描紋付羽織		1枚
(8)	JA195500796000	FT1271	藤井達吉・篠	黒地水に葦文金泥描長着		1枚
(9)	JA195500804000	FT1279	藤井達吉・篠	黒地鈴文金泥描紋付羽織		1枚
(10)	JA195500893000	FT1424	藤井篠	刺繍「白骨」ほか		4面 3幅
(11)	JA201400002000	FT1465	伝藤井篠	むらさき(松竹梅)	不詳	2曲1隻
(12)	JA201400003000	FT1466	伝藤井篠	鳥毛壁掛草花	不詳	1枚
(13)	JA195500001000	FT233	藤井桑	竹屋町繡草文	1939(昭和14年以前)	2曲1隻
(14)	JA195500778000	FT1253	藤井達吉・桑	黒地万年松文金銀泥描紋付長着		1枚
(15)	JA195500786000	FT1261	藤井達吉・桑	茶地山水文金銀泥描長着		1枚
(16)	JA195500787000	FT1262	藤井達吉・桑	茶地水に水禽文蠟染下着(襲)		1枚
(17)	JA195500797000	FT1272	藤井達吉・桑	紫地流水文金銀泥描長着		1枚
(18)	JA195500784000	FT1259	藤井達吉・房	紫地蔓草文金銀泥描長着		1枚
(19)	JA195500785000	FT1260	藤井達吉・房	紫地草花文蠟染下着(襲)		1枚
(20)	JA195500798000	FT1273	藤井達吉・房	紫地雨に菖蒲文金銀泥描長着		1枚
(21)	JA195500779000	FT1254	藤井達吉・悦	紫地山水文金銀泥描一ツ紋付長着		1枚
(22)	JA195500780000	FT1255	藤井達吉・悦	紫地山水文金銀泥描下着(襲)		1枚
(23)	JA195500792000	FT1267	藤井達吉・悦	薄紫地梅文金銀泥箔型置紋付長着		1枚
(24)	JA195500793000	FT1268	藤井達吉・悦	薄紫地小花文蠟染に竹文金銀泥描長着		1枚
(25)	JA195500794000	FT1269	藤井達吉・悦	紫地群鳥文金銀箔置長着		1枚
(26)	JA195500803000	FT1278	藤井達吉・悦	赤紫地草文金泥描紋付羽織		1枚
(27)	JM195200001000		藤井篠	紅白梅の図	1951(昭和26)年	2曲1隻
(28)	JM195400002000		藤井篠	草花	1953(昭和28)年	6曲1双
(29)	JM195400003000		藤井篠	山草	1953(昭和28)年	2曲1双
(30)	JM196100003000		藤井篠	扇面流	1959(昭和34)年	2曲1隻
(31)	JM196100004000		藤井篠	密柑春秋	1959(昭和34)年	2曲1隻
(32)	JM196100005000		藤井篠	鳥毛山草(姥百合と桜草)	制作年不詳	2曲1隻
(33)	JM196200001000		藤井篠	泰山木	1959(昭和34)年	2曲1隻
(34)	JM196200002000		藤井篠	紅白椿図	1959(昭和34)年	2曲1隻
(35)	JM196200003000		藤井篠	ペンギン	1959(昭和34)年頃	1枚(壁掛)
(36)	JM196200004000		藤井篠	桃	1959(昭和34)年	1面
(37)	JM196200005000		藤井篠	桜の咲く風景	1959(昭和34)年	1面
(38)	JM196200006000		藤井篠	桃の実	1959(昭和34)年	1幅
(39)	JM196200007000		藤井篠	梅花	1959(昭和34)年	1幅
(40)	JM196200008000		藤井篠	高山の花	1962(昭和37)年	6曲1隻
(41)	JM196200009000		藤井篠	草の花	制作年不詳	6曲1隻
(42)	JM196300001000		藤井篠	薬師寺仏足石歌	1962(昭和37)年	6曲1隻
(43)	JM196500001000		藤井篠	四国遍路八十八ヶ寺拾比来之木之葉	1962(昭和37)年	2曲1隻
(44)	JM196500002000		藤井篠	四国路	1962(昭和37)年	1枚(壁掛)
(45)	JM196500003000		藤井篠	日之出	1962(昭和37)年	1枚(壁掛)
(46)	JM196500004000		藤井篠	おち葉	1962(昭和37)年	1枚(壁掛)
(47)	JM196500005000		藤井篠	草の実	1962(昭和37)年	1枚(壁掛)
(48)	JM196500006000		藤井篠	うすゆき草	1962(昭和37)年	1幅

(2) 屏風、壁掛作品画像一覧 (番号は左頁一覧による。作は(13)のみ桑。他は全て篠作品)

<p>(11) むらさき (松竹梅)</p> 	<p>(12) 鳥毛壁掛草文</p> 	<p>(13) 竹屋町繡草文</p> 	<p>(27) 紅白梅の図</p> 
<p>(28) 草花</p> 	<p>(29) 山草</p> 	<p>(30) 扇面流</p> 	<p>(31) 蜜柑春秋</p> 
<p>(32) 鳥毛山草 (姥百合と桜草)</p> 	<p>(33) 泰山木</p> 	<p>(34) 紅白椿図</p> 	<p>(35) ペンギン</p> 
<p>(40) 高山の花</p> 	<p>(41) 草の花</p> 	<p>(42) 薬師寺仏足石歌</p> 	<p>(43) 四国遍路八十八カ寺 拾比来之木之葉</p> 
<p>(44) 四国路</p> 	<p>(45) 日之出</p> 	<p>(46) おち葉</p> 	<p>(47) 草の実</p> 

なお、篠の帝展第9回出品作品「ろう緞鳥毛繡うばゆり」と帝展第15回出品作品「射干文鳥毛額」は所蔵作品30頁表(1)の「鳥毛山草(姥百合と桜草)」に酷似しており、2曲1隻の屏風に仕立てられたとも考えられる。今後の調査を待ちたい。

おわりに

本稿では、藤井姉妹・姪の略歴及び工芸作品を紹介した。工芸作家としての彼女たちを考えるとき、達吉との関りを全く排除して論を立てることは不可能であろう。さらにこの両者の関係性は、工芸におけるデザインと製作者との関りのあり方とも考えられる。1923(大正12)年に開催された家庭手芸品展覧会に関する記事「藤井達吉氏一家の家庭手芸品展覧会の記」のなかに「藤井氏が図案をなさると錫子さんはそれを縫ひ、楸子さんはそれを染めるといふやうな風に…」⁷という記述がある。「一家による家庭手芸品展」という性格をもった展覧会にむけての制作であるが、この時点においては、達吉、姉妹・姪の作品制作における分業と共同関係が、広く認識されていたのであろう。半世紀に及ぶ制作活動のなかで、両者の関係性がどのような変化を遂げたのか、今後の研究課題として残されている。

7 『主婦之友』第7巻5号 p.221～223 (主婦之友社 1923年5月)